

# 「聖霊を意識して生きる」

## ローマ人への手紙8章1節—11節

1 こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない。2 なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。3 律法が肉により無力になっているためになし得なかった事を、神はなし遂げて下さった。すなわち、御子を、罪の肉の様で罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである。4 これは律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるためである。5 なぜなら、肉に従う者は肉のことを思い、霊に従う者は霊のことを思うからである。6 肉の思いは死であるが、霊の思いは、いのちと平安とである。7 なぜなら、肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである。8 また、肉にある者は、神を喜ばせることができない。9 しかし、神の御霊があなたがたの内に宿っているなら、あなたがたは肉におるのではなく、霊におるのである。もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない。10 もし、キリストがあなたがたの内におられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊は義のゆえに生きているのである。11 もし、イエスを死人の中からよみがえらせたかたの御霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリスト・イエスを死人の中からよみがえらせたかたは、あなたがたの内に宿っている御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも、生かしてくださるであろう。

この箇所を注意深く読まれる方はあることに気がつくたのではないかと思います。すなわち、このパウロが書き記しましたローマ人への手紙8章1節—11節の間には肉という言葉が9回も記されているということです。

ここに記されている日本語聖書で言いますところの「肉」、また英語聖書がいうところの「FLESH」という言葉ですが、この言葉は新約聖書の原語であるギリシア語では「サルクス：Σαρξ」と言い、このサルクスという言葉が用いられる時、それらは私達の肉を表すとともに、私達人間の「弱さ、無力、頼りなさ」を意味します。すなわち、諸々の試みや誘惑を前にしてそれらに対抗することが出来ない人間の罪の性質をもこのサルクスは意味しています。

そして、その肉なる人間の姿というものを赤裸々に書き記したものが先週見た7章のパウロの心内なのです。その7章では何と「わたし」という言葉が31回も書かれており、まさしくその章は「私の欲している善はしないで、欲していない悪を行っている（19）。わたしはなんとという惨めな人間なのだろうか（24）」というような肉の欲に悩むパウロ自身の心が描かれています。

しかし、転じてこの8章全体になりますと計24回も「霊」について触れられているのです。そういう意味では7章と8章は「肉」と「霊」のコントラストがよくなされているといえます。

実に7章には「私は自分の欲する善を行わないで、悪を行っている。このみじめな私を誰が救ってくれるだろうか」というパウロの嘆きと叫びが書かれており、それに対してガラリと8章の一番最初の言葉は「今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない」で始まり、その終わりは「どんな被造物も私達の主キリスト・イエスにおける神の愛から私達を引き離すことはできないのである」と締めくくられているのです。

すなわち、このことは私達の罪と欲との戦いは何によって抗していけばいいのかということ、それは霊の働きによる以外にないということパウロはここで言っているのであります。

「霊」というと私達日本人はまず「幽霊とかお化け」を思い出します。しかし、おもに聖書でいうところの「霊」とは「聖霊」を意味します。これは神の霊ということで、それは私達の目には見えません。しかし、確かに神の霊が私達の間にあるというのが聖書が言うところなのです。今日はこの聖書に記されている聖霊について、そのイントロダクションをお話したいと願っています。「イントロダクション」と言いましたのはこの聖霊のはたらきというは多岐にわたっていますので、それをこのメッセージだけでは語りえないので、その続きはまた来週、お話しさせていただきます。

イエスのことを偉大な教師、あるいは世界有数の宗教家の一人として片づけてしまう人々がいます。しかし「約束」という面でイエスの言葉と他の宗教家、哲学者のリーダーを比較してみると興味深いことが分かります。たとえば、仏教の開祖、釈迦はその最期の時に、弟子達に別れを告げて「自らを光とせよ」と言いました。ソクラテスが毒杯を仰ぎうとした時に

は、弟子の一人が自分達は孤児になってしまうと嘆きました。世界の宗教や哲学の指導者は、自分が彼らを離れて行く時、自分は決して彼らと離れないと約束することがありませんでした。

しかし、興味深いことにイエスは、たとえ弟子達の前を去らねばならなくなっても、彼らを置き去りにしませんでした。イエスはヨハネ14章18節において「私はあなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻ってくるのです」と言われました。

また、まさしく弟子たちと目に見える形では最期の別れとなる時に、イエス・キリストはこんな約束もされました「ただ、聖霊があなた方に下る時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となるであろう」。使徒行伝1章8節

すなわち、イエス様が「私達を孤児とはさせない」と言われたその約束は何によって実現されるのかというと聖霊によって、そのことがなされるということなのです。

さらにエバンジェリスト、ビリーグラハムはかつて言いました。人間には大きな霊的な飢え乾きがある。その一つは「善なるもの」への飢え乾きであり、意識的に、あるいは無意識のうちに、私達の魂はこのことを求めていると。

そして神は既にこの私達の乾き、すなわち善を求める切なる声に対して応えておられます。すなわち神は私達が信仰によってキリストのもとに来ておきながら、敗北、失意、不和の生涯を送ることを望んではおられないということです。

そして、これらのことを可能にするためにも神は私達に聖霊という大いなる賜物を与えてくださったのです。私達を捕らえている弱さから、すなわちパウロがローマ書7章で嘆いているような惨めな敗北感から逃れたいと言う求めに答える力の源が聖霊なのです。聖霊は真に私達に善をなしうる力を与えてくださるのです。

現代の世界に生きていこうとするなら、勝利の生涯を送る人となりたいのなら、神が提供された聖霊による私達の内にはたらくみわざが必要なのです。

もし、私達がイエスを信じ、そしてそのキリストが約束された聖霊の力に私達が寄り頼んでいくなれば、私達は自分の生涯のあらゆる歩み、結婚、家族関係、仕事、育児、対人関係を変えることのできる力を、私達は持つことができるのです。

でも、残念なことに、この力ほど無視され、誤解され、誤用されてきたものはありません。私達の無知によって、聖霊の力は妨げられてきてきました。私達は今一度、この聖霊による力を私達の内に取り戻さなければなりません。

私達の人生、それを知って生きるのか、知らぬままに生きるのかということで大きな違いをもたらすものです。「聖霊の働き」を知らずに生きるのは、車にはエンジンがあり、私達はその車によってたくさんの可能性を得ることができますのに、そのことを知らずに動かない車に乗って一つ所で見ているようなものです。

ですから私達の人生に直接的に関わっておられる聖霊の働きを私達はもっと知り、その働きが私達の生活の中にさらに力強くなされますように祈り、願おうではありませんか。そうする時に私達の生活は必ず変わります。

ここまで今日は聖霊についてそのイントロダクションをお話ししました。このことは聖書のメッセージの中で最も大切なことの一つであり、申し上げましたようにこの一回の礼拝ではお話しし尽くすことができません。ゆえにこの「聖霊」につきましては来週、またお話ししたいと思います。お祈りしましょう。

天のお父様、あなたが私達にして下さった約束を感謝します。そして、その約束の聖霊が今日も私達を教え、励まし、導いていて下さることを感謝します。どうかこの聖霊に寄り頼む人生を送らせて下さい。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン